

昨日に変わらぬ今日、今日に変わらぬ明日

—その行く先は?—

鈴木伶子 (会員、日本YWCA元総幹事)

1945年10月に初めて小学校に入った私が手にした教科書は、「ネズミの嫁入り」の話を残して、すべて墨塗りされていました。翌年の教科書は、新聞紙のような物を自分で折ってとじる粗末な物でしたが、平和と民主主義の一色でした。一年で戦争から平和へと塗り替えられた教科書を手に、戦争も平和も、これほどたやすく変えられるものかと戸惑いました。

いま、日本は平和だ、と思っている人が大勢いますが、実は巨大な軍事国家になっています。日本国憲法には、前文や第9条で、戦争をしない、武力は持たないと決めています。歴代の政権はこれを骨抜きにしてきました。5年前には集団的自衛権という名で、自衛隊が米軍と協力して世界規模で働けるようにしました。国内でも、沖縄の人々の総意を無視して辺野古新基地建設が進められ、宮古島は島全体が要塞化され、山口と秋田では地上配備型迎撃システムが配備されようとしています。護衛艦を航空母艦に改装し、最新鋭のステルス戦闘機を搭載するそうです。自衛のためという名目で、実際には攻撃できる国になっているのです。その反面、社会福祉は遅れ、食事にも事欠き、学校に行かれない子どもがいたり、ホームレスや無職の人也大勢います。これは決して平和な社会ではありません。

50年ほど前、「どうして戦争になるまで反対しなかったの?」という私の質問に対し、YWCAの先輩関屋綾子さんは「昨日に変わらぬ今日、今日に変わらぬ明日、というように、少しずつ変わっていくと、気がつかないうちに巻き込まれてしまうのよ」と教えてくれました。

最近、米国のトランプ大統領が日米安全保障条約は、米国が日本を守るのに対し、米国が攻撃されても日本は米国を守らず、不公平だと言い出しました。この安保条約は、1960年に市民や学生が大反対をし、国会を取り巻いた人々が新橋あたりまで、ぎっしり詰めかけていました。反対の趣旨は、日本国内に米軍の駐留基地を提供することで、米軍と結びついて世界の紛争に巻き込まれていくことが平和憲法を覆すと当時の人たちは、恐れたのです。少しずつ慣らされていった結果、今や米国大統

領は米国を守るために自衛隊が世界に展開することを期待すると公言するまでになりました。

後世の人たちは、2019年の私たちを見て、どうしてあれほど戦争に巻き込まれる恐れが明確にあったのに、何も反対しなかったのかと、不思議に思うかもしれません。今の子どもたちが戦争の悲劇を味わう恐れがあります。日本の子どもだけではありません。日本が戦争をすれば、被害を受けるのは再びアジア・太平洋の人々です。

60年安保で興奮していた私に、韓国の学生が、自分の父は日本植民地下で捕まえられ拷問されて瀕死状態になった、と告げました。100年前に水道橋の朝鮮 YMCA で日本植民地支配に抵抗して立ち上がった朝鮮人学生たちは、故国に帰り、国を挙げての抵抗運動に入っていました。その抵抗の精神は、その後の独裁政権を倒し、ローソク革命の成功へと続きました。抵抗し続ける精神が民主主義を生んでいるのです。

日本の私たちも、時代に流されていくのではなく、嫌なものは嫌とはっきり拒否していくことが必要です。すでに、秘密保護法、共謀罪法など、私たちが抵抗することを困難にする体制ができていて、平和を求めて立ち上がることも困難かもしれません。でも、今声を上げ、平和を求めて立ち上がらないでどうするのでしょうか。

憲法前文の「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないよう」に見張り、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意」する精神を持ち続けるよう努力しましょう。